

の予想を覆し、1000人近くの人が集まった熱気に押され、昨日までしていた否定的な話を引っ込めて、「双海の夕日は日本一」と持ち上げ、駅周辺は開業以来の大騒動となりました。後日収録された番組は全国放送され、双海の夕日は一躍有名となりました。

私にとって夕焼けコンサートの開催には夕日以外にもう一つ別の隠し味がありました。ちょうどその頃JRは地滑り地帯を走る予讃線海岸周りの代替線として伊予市向原から内子を通して大洲に抜ける山周り線の本線にするべく開通させていて、並行路線となる海岸周りは廃線になる運命にありました。沿線に住む私たち町民、とりわけ通学の高中生や病院へ通う高齢者など弱者の交通手段をなくすことは死活問題でした。行政も「乗って守ろう予讃線海岸周り」などと存続運動を興していましたが、その成果も上がりず苦慮していました。そんな海岸周りにスポットを当てようとしたのです。

しかし年に一度の駅のプラットホームを利用したコンサートくらいで守れるものではないことは容易に理解できました。しかし世の中は何があるか分からないもので、NHKテレビ西日本の旅の反響は大きく、年に一度開くこのコンサートや、コスモス鉄道双海号2001年の旅、夕焼けトロッコ列車、夕焼けビール列車、SL運行などなどを粘り強く続け、地元の人たちの駅を愛する心と行動が通じたお陰で、あれから37年経った今も海岸周りは廃線になることもなく残り、NHK72時間テレビや観光列車伊予灘ものがたりの運行、青春18きっぷキャンペーンポスターなど、数々の話題も増えて多くの人を訪れる、全国でも一、二を争う有名な駅となっているのです。

7 スタートしたまちづくり

夕焼けコンサートを成功させたあくる年、私はまちづくり専従職員として企画調整室へ異動になりました。昭和62年をまちづくり元年と定め、まちづくり30人委員会、まちづくりエプロン会議、

まちづくり青年会議をスタートさせ、18時間マラソンシンポジウムを経て、まちづくりの目標を①人づくり、②拠点づくり、③住民総参加のオンリーワンづくりの3つに決めました。しかし住民の反応は鈍くまちづくりは容易ではありませんでした。

最近「あなたにとってまちづくりの原点は何ですか?」とよく尋ねられることがありますが、「強いて挙げれば自分の町を語れなかった3つの出来事です」と答えています。1つ目は愛媛県青年団連合会の会長をしていた時、東京の日本青年館で全国青年問題集會に30人の青年を連れて出かけました。その折交流会で自己紹介したものの、「愛媛県」と言えば愛知県と間違われ、「松山」といえば埼玉県の東松山と間違われ、「道後温泉の近くです」でやっと言葉が通じたものの、「そこから25キロ西の瀬戸内海に面した町」と説明しても「あなたの町は電気が点いてるのか」と笑われるなど、全く自分のふるさとの自慢が語れなかったという悔しい思い出です。2つ目は「双海の子どもたちは自分の町を語れない」という高校教師の言葉でした。私の町には高校がないため中学校を出るとみんな松山など町外の学校へ通うのですが、入学式の日「君はどこから来ているのか」と尋ねると、「先生、私は伊予市の向こう、長浜のこっちのそこらへん」と言うらしいのです。親も「勉強せんと親みたいに田舎で漁師や百姓をしなきゃあならない、お前も頑張れ」と自分の町や仕事を卑下し、向都離村の教育をしていたのです。3つ目は青年会議を立ち上げ30人のメンバーをわが煙会所に集め、「これからは君たち青年の出番だ」と熱っぽく語ったものの、田舎嘆きの10ヶ条しか言いませんでした（第1条 田舎には仕事がない、第2条 田舎には活気がない、第3条 田舎には文化がない、第4条 田舎には嫁が来ない、第5条 田舎にはプライバシーがない、第6条 田舎には遊ぶ場がない、第7条 田舎には狭い道しかない、第8条 田舎にはいい店がない、第9条 田舎には情報が遅くて古くて少ない、第